

ChatGPT 4o

共有する

Hi

あなた:

03.pdf

PDF

要約してください。

ChatGPT:

ChatGPT

この文書は、産業構造審議会知的財産分科会 第16回意匠制度小委員会（令和6年12月6日）の資料であり、DX時代に対応した意匠制度や生成AI技術、仮想空間デザインの保護に関する検討課題を扱っています。以下に主要なポイントを要約します。

1. DX時代にふさわしい産業財産権制度構築の必要性

- デジタル技術の進展に対応するための産業財産権制度の改正が進行中。
- 主な技術進展：
 1. ネットワーク関連技術の進展による国境を超えたサービスの増加。
 2. 生成AI技術の発展による創造活動の変化。
 3. 仮想空間サービスの増加。

2. 仮想空間デザインに関する課題

- 現実空間と仮想空間でデザイン保護の重要性が高まる中、不正競争防止法や意匠法などの適用範囲を見直し中。
- 仮想空間でのデザイン利用（例：アバター、仮想オブジェクト）やビジネスの実態調査を進め、適切な制度的対応を模索。

3. 生成AI技術の発展と意匠制度

- AIを活用したデザイン生成が普及しつつあり、以下の課題が議論中：
 1. AI生成物の新規性や創作非容易性の要件に関する懸念。
 2. AIを用いたデザイン創作の権利保護範囲。

4. 関連調査・検討

- 特許庁は国内外で仮想空間と意匠権の調査を実施し、クリエイターや企業からの意見を収集。
- 現行の保護対象の拡大や仮想空間デザインの具体的保護方針を検討中。

この資料の中核は、DX 時代や仮想空間、生成 AI 技術に対応した意匠制度の構築および見直しの方向性を議論し、関連する具体的な課題を洗い出している点です。必要に応じて、各セクションをさらに詳しく解説可能です。

4o

あなた:

「3. 生成 AI 技術の発展と意匠制度 AI を活用したデザイン生成が普及しつつあり、以下の課題が議論中： AI 生成物の新規性や創作非容易性の要件に関する懸念。 AI を用いたデザイン創作の権利保護範囲。」を詳しく

ChatGPT:

ChatGPT

生成 AI 技術の発展と意匠制度に関する議論では、AI を活用したデザイン生成が普及する中で、意匠制度における以下の課題が取り上げられています。

1. AI 生成物の新規性や創作非容易性の要件に関する懸念

意匠法に基づくデザインの保護には、**新規性**と**創作非容易性**という要件が重要です。AI 生成物の普及に伴い、これらの要件が次のような影響を受けると懸念されています。

(1) AI 生成物が新規性要件に与える影響

- 生成 AI 技術を利用すると、短時間で大量のデザインを作成・公開することが可能となります。
- AI が生成したデザインが短期間で公知状態となり、新規性を失う可能性が高まる。
- 特定分野で同様のデザインが大量に生成されることで、後発のデザインが新規性を満たさない事態が生じる。

(2) 創作非容易性に関する課題

- AI によって生成されたデザインは、従来のデザイナーが手作業で創作する場合よりも容易に実現可能。
 - そのため、AI 生成物が創作非容易性の要件を満たさない可能性が指摘されています。
-

2. AI を用いたデザイン創作の権利保護範囲

AI 生成物が意匠法による保護の対象となるためには、どのような状況で保護が適用されるかが問題となります。

(1) AI 生成物の意匠法適用条件

- **自然人の関与:** AI を利用したデザイン生成であっても、自然人が AI を道具として使用し、デザイン創作に実質的に関与している場合、意匠法による保護が認められる可能性があります。
- **権利の帰属:** AI が生成したデザインに対して、AI 自体が権利を持つことはなく、そ

の生成過程で関与した自然人や法人に権利が帰属する。

(2) 依拠性と類似性の判断

- **依拠性の不要性:** 意匠法では、侵害の判断において依拠性は不要とされます。AI生成物も同様に、従来の意匠権侵害と同じ基準で判断される。
- **類似性判断の課題:** AI生成物は大量生成されるため、従来と異なる考慮要素が必要になる可能性があります。

3. AI時代の知的財産権検討会での結論と課題

内閣府の「AI時代の知的財産権検討会」(令和6年5月中間とりまとめ)では、以下の検討結果が示されています。

- **学習段階:** 他人の登録意匠を学習データとしてAIに学習させる行為は意匠法上の「実施」に該当せず、侵害にはならない。
- **生成・利用段階:** AI生成物に登録意匠が含まれる場合、意匠権侵害の判断は従来と同じ基準で行われる。
- **AI生成物の保護:** 自然人が関与していれば意匠法による保護が可能。ただし、大量生成が新規性や創作非容易性に与える影響は引き続き検討が必要。

4. 今後の検討課題

生成AI技術の進展による意匠制度への影響は以下の点で引き続き議論されます。

- **公知意匠の急増への対応策:** AI生成物が公知化するスピードに対応した制度の整備。
- **創作非容易性の再定義:** AI生成が一般化する中で、創作の難易度をどのように評価するか。
- **国際的な調和:** 他国の意匠法制度やAI生成物に関する議論を参考に、日本国内の制度を整備する。

この議論は、生成AIの急速な技術進展に伴い、意匠法の現行の基準が適応しきれない可能性を前提に、法制度の見直しや運用指針の作成を進める方向性が示されています。

4o

あなた:

「公知意匠の急増への対応策: AI生成物が公知化するスピードに対応した制度の整備。」を詳しく

ChatGPT:

ChatGPT

AI生成技術の発展により、公知意匠の急増が意匠制度に与える影響が懸念されています。この問題に対処するための対応策について、以下に詳しく説明します。

1. 公知意匠の急増における問題点

AI 生成技術によって短時間で大量のデザインが生成・公開されることで、以下の問題が発生しています。

(1) 新規性の喪失

- 意匠が保護されるためには、新規性が要件となります。
- AI 生成物が大量にオンラインで公開されると、意図せず新規性が失われるリスクが高まります。
- 特に、商業的に重要なデザインが先に公知化されると、意匠登録の道が閉ざされる場合があります。

(2) 意匠審査の複雑化

- 公知化された意匠の増加により、審査官が新規性や類似性を判断する作業が大幅に増加します。
- 膨大な公知データベースを参照する必要があるため、審査効率の低下や誤判定のリスクが高まります。

(3) 意匠創作の萎縮

- AI 生成物が短期間で市場に出回ることで、デザイナーが新しい意匠を創作する意欲を失う可能性があります。

2. 公知意匠の急増に対応する制度的アプローチ

これらの課題に対処するために、以下のような制度的対応策が提案・検討されています。

(1) AI 生成物の公知化データベースの整備

- **統一データベースの構築:**
 - AI 生成物を含む全ての公知意匠を一元管理するデータベースを構築。
 - 審査官が効率的に公知意匠を検索できる環境を整備。
- **登録申請時の自動比較ツール:**
 - AI を活用した類似性検索ツールを導入し、登録申請時に新規性の審査を迅速化。

(2) 新規性喪失例外の柔軟化

- **公知化までの猶予期間の延長:**
 - 現行の制度では、意匠が公知化されてから一定期間内であれば新規性喪失例外が認められます。この期間を延長することで、AI 生成物による早期の公知化リスクを軽減。
- **公知意匠の特例規定:**
 - AI 生成物に関しては、公知化されたデザインであっても特定条件下で新規性を認める特例を設ける。

(3) AI 生成物の公知化に関するルール作成

- **公開の定義の見直し:**
 - AI 生成物の大量生成と公開について、「公知」と見なされる条件を再検討。限定的な公開（例：特定のユーザー間のみで共有）は公知としないルールを導入。
 - **AI 生成プラットフォームとの連携:**
 - AI 生成物が公開される主要なプラットフォームと連携し、生成された意匠のトラッキングや登録手続きの円滑化を図る。
-

3. 国際的な調和と連携

AI 生成物の公知意匠への対応は、国内だけでなく国際的な協調が求められます。

(1) 国際データベースの構築

- WIPO（世界知的所有権機関）を中心とした国際的な意匠データベースの構築により、各国の公知意匠情報を統合。

(2) 各国の審査基準の統一

- AI 生成物に関する新規性・創作非容易性の基準を統一し、国境を超えた意匠保護を実現。
-

4. 技術的アプローチによる対応

AI 生成物の急増に対応するため、最新の技術を活用した以下の方法が提案されています。

(1) AI を活用した類似性検索システム

- AI 技術を用いて、大量の公知意匠データの中から類似意匠を高速かつ正確に特定するシステムを構築。

(2) ブロックチェーンによる生成履歴の管理

- AI 生成物の生成履歴や公開日時をブロックチェーンで記録し、意匠登録申請時の証拠として活用。

(3) 生成 AI の透明性向上

- AI が生成したデザインに関するメタデータ（生成日時、使用アルゴリズム、入力データ）を明示する義務化。
-

5. 今後の課題

- 制度整備と同時に、AI 生成物の公知意匠が意匠制度全体に及ぼす影響を慎重に検討する必要があります。
 - クリエイターや AI 生成プラットフォーム運営者との協力体制を構築し、現場の意見を反映させることが重要です。
-

これらの対策により、AI 生成技術の発展が意匠制度に与える影響を最小限に抑え、公知意

匠の急増に柔軟に対応できる制度を構築することが目指されています。

4o

あなた:

「創作非容易性の再定義: AI 生成が一般化する中で、創作の難易度をどのように評価するか。」をくわしく

ChatGPT:

ChatGPT

創作非容易性の再定義に関する課題

意匠法における「創作非容易性」とは、既存の知識やデザインに基づいて容易に思いつくことができない程度の創作性を指し、意匠登録の要件の一つとなっています。しかし、生成 AI 技術の発展により、この要件が従来の基準では適切に適用できない可能性が指摘されています。

以下に創作非容易性の再定義に関する詳細な課題と議論のポイントを示します。

1. AI 生成による創作非容易性の問題点

(1) AI 生成の「容易性」

- AI を活用することで、膨大な既存データに基づいて新しいデザインを短時間で生成できる。
- AI が創作プロセスを自動化するため、デザイナーの従来の手作業とは異なり、創作の難易度が低下。
- その結果、AI 生成物が創作非容易性を満たすかどうかの評価が困難になる。

(2) AI 生成物の大量性

- AI は短時間で多数のデザインを生成可能であり、それらの中から選ばれた一部だけが登録される可能性が高い。
- これにより、個別のデザインの独自性や創作性を評価する基準が曖昧になる。

(3) 既存データへの依存

- AI が学習したデータセットに依存して生成されるため、生成物が既存デザインとの類似性を持つ可能性が高い。
 - この場合、AI 生成物を「容易に創作できる」と見なすべきか、「新しい組み合わせ」として評価すべきかが不明確。
-

2. 創作非容易性の再定義に向けたアプローチ

(1) AI の役割を考慮した創作性の評価

- AI が単なるツールとして使用される場合と、AI が主体的に生成した場合を区別。
 - **自然人の関与**があれば創作非容易性を認める方向性。
 - 自然人が AI 生成物に手を加えることで、オリジナリティが付加された場合

には評価を肯定。

(2) 「創作プロセス」の評価

- 従来の「デザイン結果」のみを評価する方法から、「創作プロセス」そのものを評価するアプローチへ転換。
- 具体的には以下を考慮：
 - AIの使用目的（単なる補助か、主導的な役割か）。
 - AI生成後の編集や加工の有無。

(3) 創作非容易性の定量化

- 従来の感覚的な評価から、AIの生成アルゴリズムや使用データセットを基にした定量的な評価基準の導入。
- 例えば、生成されたデザインが既存デザインからどの程度異なるかを測定するアルゴリズムを活用。

(4) デザインの「新規性」への依存度の低下

- 創作非容易性の評価において、新規性との混同を避けるため、新しいデザインの独創性を評価する基準を明確化。

3. 国際的な事例と議論

他国の意匠制度におけるAI生成物の創作非容易性の取り扱いについて、日本が参考にできるいくつかの議論があります。

(1) 欧州連合 (EU)

- EUでは、AI生成物においても自然人の関与が重視される。
- AIが生成したデザインが「技術的特徴」のみならず「芸術的特徴」を持つ場合に創作性が認められる可能性が議論されている。

(2) 米国

- AI生成物における創作性の基準は未確立であり、「意図的な創作」があれば評価の対象となる可能性がある。
- 自然人の寄与がない場合には特許性・著作権性が否定される判例もある。

(3) 他国の影響

- 韓国や中国では、AI生成物に対する評価基準が曖昧であり、日本が基準を先導するチャンスがある。

4. 技術的支援と制度の補完

創作非容易性を適切に評価するために、以下の技術や制度を活用することが考えられます。

(1) AI生成物のトレーサビリティ

- AI生成物の生成プロセスやデータセットを記録することで、創作非容易性を評価可能にする。

- ブロックチェーン技術を用いて、生成過程を透明化。

(2) 公知デザインとの比較アルゴリズム

- AI 技術を利用して、新規性や類似性だけでなく創作性を定量的に評価するシステムを構築。

(3) 制度的ガイドライン

- AI 生成物の登録に関する基準や手続きのガイドラインを明文化。
 - 創作非容易性の具体例を提示することで、デザイナーや審査官の理解を深める。
-

5. 今後の課題

- AI 生成物の大量性を前提に、審査の効率化と基準の明確化をどのように両立するか。
 - 創作非容易性を厳格に定義することで、意匠登録のハードルを上げすぎないようにする調整。
 - 自然人が AI を活用して創作したデザインをどこまでオリジナルとして評価するか
の国際的な議論への対応。
-

これらの取り組みは、AI が主導するデザイン生成が一般化する時代において、意匠制度がクリエイターの権利保護と技術進化に柔軟に対応するための基盤を提供することを目指しています。